
君のいない町

ジュノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のいない町

【Nコード】

N8903G

【作者名】

ジュノ

【あらすじ】

大学に合格し大学に通うために一人暮らしを始めた。少女が主人公。その少女には高校時代思いを募らせた男子がいた。結局、友達関係に甘んじてしまった少女とその男子。そして、ハチャメチャな先輩との物語。

第一話「見知らぬ春の空」

私があなたを好きだったとき。

あなたは、私に振り向いてはくれなかった。

必死に着飾る私を、見ないで

純朴な女の子に夢中になっていた。

やっと振り向いてくれたとき。私は、あなたの住む街にはいなかった。

ピンポン。

部屋中に音が響く。少女は、料理の手を止め。人の気配のする玄関へと向かった。

ガチャ、

「はい、宅急便ですが、内藤梓さまでいらっしゃいますか？」

必死に走ってきたのだろうか、額には汗がにじんでいる。

「は、はい。私が内藤梓ですが。」

少し困惑気味の返事をする。

配達員は、すかさず、

「では、こちらにサインお願いしてもいいですか？」

みかん箱1箱分くらいのちょうどいい大きさの荷物を差し出す。

「わかりました、ここに書けばいいんですね？」

梓は、決まり文句のように声を発し、長くてきれいな指で内藤というサインをした。

「ありがとうございますー」配達員は、汗に濡れた帽子を脱ぎ元氣よく挨拶をしコツコツと音を鳴らしアパートの階段を下りて行った。

ふう。梓のため息が無限に広がった世界にかき消されていく。

「久しぶりに人と話したー」疲れにも似た感情を押し殺せず、荷物をほったらかしにしてベッドに寝そべった、

「こつちに引つ越してから、人と会うのが嫌になつたなあー」

梓は、この町に引つ越してからまだ4日しかたっていない。

今年、19歳になる梓は、大学に通うために一人暮らしをしていた。一人で洗濯、料理、買い物、等の家事をこなしていった。

（こんな感情をもつてたら大学で友達なんて作れるわけないよ）

横になったベッドの上で天井を見つめる。

天井に向かって手を伸ばし、ふっーと息を吐く。ボタンと手を落とした先に届いた荷物があつた。

「誰から、だろう？」独り言のようにつぶやく。

相馬航大。

少々雑だが、男らしい字に今までの不安がすべて掻き消えそうになった。

梓は、しっかりとほられたガムテープを外し、中身を確認する。

大量のインスタントラーメンとふりかけとかが出てきた。

クスッ。梓の顔に笑みがこぼれた。

「バツカじゃない。こんなのこの町でも売ってるよ」

少女は、この町で初めて感情を表に出した。なれない街で心を閉ざしていた梓。

故郷から届いた、荷物に昔の自分を思い出した。

ガサゴソ、

インスタントラーメンの間から見慣れない一つの封筒が出てきた。

丁寧にのりづけされた封筒には、さっきと同じ字が躍っていた。

相馬航大。

梓は、その封筒を丁寧にハサミでカットすると、

「よっ！そっちへ行ってさみしくないか？おれはさみしいぞ（笑）きつとお前は、料理が下手だろうからこれでも食って頑張つてな！」

また少女が、クスッと笑った。私だって料理ぐらいできるわよ。という柔らかな表情を

最後の行に、「俺とおまえは、高校卒業しても親友だかな」
相馬航大、

彼は、高校時代梓のクラスメートだった。幼少期から美人ともてはやされていた梓。それに引き替え、スポーツ万能でサッカー部のエース。

よくあるストーリーに周りは、興奮を抑えきれなかった。

しかし、航大には、好きな女の子がいた。美人ともてはやされた梓とは、似ても似つかない純朴な少女だった。

結局、航大も梓も意中の人に思いを伝えることはなかった。

航大も梓も、親友でいることに甘んじてしまった。

好きという気持ちを伝えれば、

冗談じゃないんだよっていつちゃえば。

二人は、いつも、言う理由よりも、言わない言い訳を考えてた。

届いた荷物を横にやり、途中で止まっていた昼御飯に取り掛かる。

まな板と包丁の音に故郷を思い出しながら、高校3年間を懐かしんでみる。

航大と出会ったのは、入学式の時だった。

航大は、入学式に遅刻してきた。

「まじかよ。間に合わなかった」左腕にしてきた腕時計を見ながら落ち込んだ表情を見せた。

「まだ、大丈夫よ。」

やさしく、柔らかい声が後ろから聞こえる。

航大が後ろを振り向くと、モデル体型のすらっとして美人が立っている。

「あなた、相馬航大君でしょ？」

航大は、初めて会った、少女に名前を呼ばれてキョトンとしていた。

私は、内藤梓。

この時二人は出会った。

梓は、持っていたハンカチを航大に渡し、

「これで額の汗でもぬぐったら？みつともないわよ」

航大は、さしだされたハンカチをわけもわからず手に取り言われたとおり額の汗をぬぐった。

「私はね、あなたが待つように言われてきていたの。きつと遅刻してくるだろうから」

少女は、くるりと踵を返す

「あなたって結構有名よ、サッカーが上手いってのと大の遅刻魔だっことで」

少女は、もう一度踵を返し航大の顔を覗き込む。

「まだ式は、始ってないわよ。だって、あなただけには集合時間の30分前に知らせたんだもの。」

少女は、クスリつとわらった。手で口元を隠し少女らしいかわいらしい表情をした。

航大は、いまだにキョトンしていた。

梓は、まるで、舞台女優のような大げさな演技で時計を見て

「それでも予想以上に来るのが遅かったわね。もう少して始まるわよ。」

梓は、キョトンとしている航大を引っ張って式会場の体育館まで連れて行った。

必死に走ってきた航大は、シャツは、ズボンから出て、髪の毛もぐしぐしやだった。

もちろん、あとで先生にきつく怒られていたようだった。

式が始まり、長ったらしいお説教が始まり、知らない音楽が流れて式は、終わった。

入学式の後の教室移動。

1年間使う教室とクラスメートを紹介された。

ひとりひとり、自己紹介を始めると自分の横には、あの少女が座っていることに気づく。

「私の名前は、内藤梓、東中から来ました、」

梓は、そういうと周りの目を全く気にせずに航大のほうを向いてピースしながら席に座った。

航大は、梓のフワッと流れる髪に乗って運ばれるのかな香りに酔っていた。

「つぎ、横のやつ。自己紹介を始めんか！」

見るからに体育会系のガタイのいい先生が航大を指さす、

航大は、あせって立ち上がった。

「お、おれの名前は、相馬航大、南中から来ました。」簡単な説明を終えると梓をちらつと見ながら席に座った。

これがお互い初めて出会った日のことであつた。それから3年間同じクラスで。

恋人のような友人関係を築いていった。

あくまでも友人関係でしかなかったが。

「いつからだろう・・・私が航大に恋をしたのは」誰もいない部屋の片隅で考える。いつも触れる自分の体がやけに冷たい。そつと誰かに触れたくなる。窓の外に目をやり届かない空に手を伸ばす、「ああ、駄目だね。もう諦めたはずだよ」いつもの問答を繰り返す。繰り返して、繰り返して、その言葉に答えなんてものはなくって、

「あつ、今日から部活あるんだった！」

梓は、テンパった様子で身支度を整える。「初日から遅れるなんて嫌だよ」部屋を出て鍵を閉める。オーソドックスな2階建てのアパート。「ああ、こんなところに女の子が住んでるなんて」そして、学生アパートらしいオンボロ具合だった。水の出が悪くてよくトイレが詰まっていた。高校の時から使ってた自転車にまたがり目的目指して走っていく。空が広くて息がつまりそうになる、春の陽気、すべて失っても大丈夫。そんな気分になる。

ガチャ、なんとか、梓は時間に間に合い、駐輪場に自転車を止めた。時間的には、楽勝で間に合っていた、しかし、梓は小走りで部室へ向かっていった。

「おはようございます！」午前11時。部室につくと先輩に挨拶をした。「別に、そんなにかしこまらなくていいよ」と先輩と思われる少女が入り口の梓を見る「いえ、」と梓。

「このクラブでやる内容とか説明受けた？」と先輩らしき少女が問

いかける。「いえ、まず自己紹介していいですか？」と梓。先輩らしき少女は、「忘れてた」という顔をして梓に自己紹介を促す。「内藤梓です。法学部1年の内藤梓です。」と。「梓ちゃんね。私は、園部由紀。法学部2年だよ。わからないことあったら聞いてね。」その後、その先輩は踵を返し窓の外を見る。「一応、もうちょっとしたら部長くるから。少しだけ待っててね」「はい」そして、園部由紀はもう一度踵を返し梓の顔を覗き込む「その間、少しだけ説明するね。私たちのクラブは、基本的に今日みたいに土曜日の11時ぐらいから始まってミーティング。そのとき決まったことを実行、っていう具合ね。まあ、簡単に言えば新聞部だね。ミーティングで、取材対象を決め、で、取材」と園部先輩は身振り手振り真剣に伝えようと頑張っていた。

そして、ガチャ。とドアが開いた。ドア付近にいた、梓は少しバランスを崩しながら「おはようございます！」「ああ、別に挨拶なんてしなくていいよ」とはいつてきた少女は手を挙げる「新入生さんね？私は、白石遥。経済学部3年ね。で、一応この部の。×通信の部長。」そのまま白石部長は、一番奥の自分の机目指して歩いてく決して長い距離ではない。ましてやそこまに行くまでに障害あるわけではない。けれども、白石部長は、転んだ。「きゃあー」梓は、驚いて呆然としていた。「何やってるんですか？遥先輩」と園部先輩は白石部長を抱き起こす「ありがとう。ゆきちゃん」

なんとか、白石部長は特等席に座った。「ばーん。なんと」ともったいつけて梓のほうへピースをする。「知ってた？これで部員全員なんだよ」と。梓の頭に失敗という2文字が躍った。けれどもその頭で少しばかりの疑問が生まれた。「えっ？でもだったら、廃部じゃないんですか？」と梓は先輩二人に問い抱える。「大丈夫だよ。幽霊部員がたくさんいるから！」白石部長は、胸を張って梓にもう一度ピースをした。「だからこそ、助け合ってきちんとやっていこうね」と園部先輩「はい」。

そして、初めての部活は、特に何かをするわけではなく終わった。「

じゃあ、また来週ここだね」と白石部長。

大学は、始まっていた。

けれども、まだ高校の残り香みたいなものが漂っていた。

部室を出ると春の風に驚いて空を見上げると、あまりにきれいで少し不安になった。

第一話「見知らぬ春の空」（後書き）

読んでくれて、ありがとうございます。

初投稿です。

文章能力もなくてありきたりなものしかけないますが、よかったわ
ら付き合ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8903g/>

君のいない町

2010年10月28日04時41分発行